公益財団法人日本陸上競技連盟
陸上競技研究紀要
第20巻, 205-209, 2024
Bulletin of Studies
in Athletics of JAAF
Vol.20,205-209,2024

パリオリンピック帯同報告

鎌田 浩史 [1)2)]
1）公益財団法人日本陸上競技連盟　医事委員会　　2）筑波大学　医学医療系　整形外科

【はじめに】

2024年7月、4年に一度の祭典であるオリンピックがパリで開催された（図1）。前回の大会はご存じの通り「東京」で行われたが、Covid-19の感染拡大の影響により、無観客試合や選手団のバブル隔離といった、これまでに例のない形式での開催となった。1年の延期により2021年に開催されたため、今回のオリンピックはあっという間に訪れたように感じられた。今回、選手団に帯同したので、その活動内容について報告する。

図1：陸上競技会会場（Stade de France）

【選手団とその動き】

今回は55名の選手が選出された。メディカルスタッフとしては、ドクター1名とトレーナー2名がJOC派遣、合宿地・村外活動としてドクター1名とトレーナー3名の計7名でオリンピックのサポートにあたった（図2）。選手団はパリから約1時間離れた郊外の「セルジー」で合宿を行いながら大会に臨んだ。この合宿は、時差調整と選手村より良い環境でのトレーニングを目的として実施されたものである。栄養士も同行し、日本食を中心とした栄養管理が行われたほか、個々のコーチやトレーナーがサポートできる体制となっていた。これにより、試合直前のコンディショニングとして非常に効果的な環境が整えられた。

セルジーは閑静な地域であり、日本選手団が単独で利用できる練習会場も確保されていた。そのため、選手たちは快適な環境の中で調整を行い、試合直前まで合宿所に滞在する選手も多く見られた

図2：メディカルスタッフ

【オリンピック大会前の取り組み】

代表選手の決定後、各選手のコンディションを把握するため、メディカルアンケートを実施した。このアンケートでは、健康状態の現状把握に加え、既往歴やアレルギー、予防接種歴、さらに女性アスリートには月経に関する問題点を確認することができる。その結果、対応が必要な選手には個別にアプローチを行い、適切なアドバイスを行った。また、内服薬やサプリメントの使用状況についてはスポーツファーマシストと連携し、安全かつ適切な使用を確認した上でフィードバックを行った。

図 3：選手村の居室　設置型エアコン

図 5：選手村での選手へのサポート

図 4：リビングのトレーナーステーション

図 6：選手村の食堂

大会が近づく 1 か月前からは、コンディションチェックアプリ『ONE TAP SPORT』を活用し、週 1 回のコンディション確認を実施した。大会期間中には、選手村入村時および試合 2 日前にコンディションを確認し､その情報を担当コーチと共有しながら、選手が最高の状態で競技に臨めるよう調整を図った。

特にマラソン競技では、代表選手の決定以降、監督・コーチと定期的にミーティングを行い、その中で選手のコンディションを直接確認し、適切なアドバイスを提供する場を設けた｡この取り組みにより、効果的なサポート体制が構築されたと感じられた。

【環境・会場・選手村】

オリンピックの選手村は、一つのユニット内にいくつかの小部屋が配置された構造となっており、我々の部屋はメゾネットタイプで、スタッフ 8 人が滞在した。中には他競技のスタッフと同室になった者もおり、生活リズムの違いに戸惑う場面が見られるなど、オリンピックならではの状況も経験した。部屋にはエアコンが備え付けられていなかったため、日本選手団用に JOC が準備した設置型エアコンを到着後すぐにセットした。日本ほどの暑さではないものの、日中はエアコンをフル稼働で使用していた（図 3）。

リビングルームはトレーナーステーションとして使用し、主にベッドを 2 台設置して（図 4）選手のケアと診療を行った（図 5）。水回りはシャワーやトイレは清潔で水量も十分だったが、シャワールームのカーテンが不十分なため水浸しになることがあり、コーチと工夫して環境を整えた。また、バスタブの使用を希望する選手もおり、JOC が準備したバスタブを活用して交代浴を行う場面もあった。

日本選手が滞在する建物は、選手村の中心地区からやや離れた場所に位置しており、食事や移動に若干の負担を感じることがあった。シャトルカートや自転車も利用可能だったが、多くの選手やスタッフ

図 7：選手村での朝食

図 8：JOC ドクター、他競技ドクター

は 10 分ほど歩いて中心地区まで移動していた。

食事はビュッフェ形式で、多様な料理から選ぶことができた（図 6）。東京オリンピックの水準と比べるとやや物足りなさを感じる部分もあったが、工夫次第で問題なく食事を摂ることができた。重要な栄養補給の場であるため、それぞれが工夫しながら食べやすいものを選んで摂取していた（図 7）。アジア系の食事も一部用意されていたが・・・・これはいま一つであった。衛生面での大きな問題はなく、消化器症状に関するサポートが必要な事態は発生しなかった。

日本選手が滞在するエリアには、JOC によるさまざまなサポート体制が整備されていた。医学的サポートとして、JOC ドクターが常駐するメディカルルーム、JOC トレーナーによるコンディショニングルームが設置され、さらにアイスバスや温浴、交代浴の設備も完備されていた。また、ウェルフェアオフィサーも帯同しており、選手のメンタル面を支える体制が整っていた。このような取り組みは非常に

図 9：サブトラックでの選手へのサポート

心強いサポート体制であったが、幸い我々選手団では利用する場面はほとんどなかった（図 8）。

さらに、大会期間中、選手が良好なコンディションを維持できるよう、JOC G-Road Station も設置されていた。このステーションは、「和軽食（補食）」を提供して試合前後の栄養補給をサポートすること、そして選手が気軽に立ち寄れてリラックスできる空間を提供することを目的としていた。日本食の軽食や栄養補助食品が豊富に用意されており、選手にとって非常にありがたいサポートであった。

【メディカルサポート】

試合前・当日、ウォーミングアップの前後、試合後、さらにラウンド間において、選手村や大会会場でメディカル対応を行った。チームドクターは一人であったため、試合中に私が対応できない場合は JOC ドクターに連携を依頼し、診察や処置をお願いした。競技会場には村外ドクターやトレーナーが入ることが可能だったため、時間帯を設定してサポートを実施した。（図 9）

競技場内のアクセスは必ずしも良好ではなく、選手たちを見守る適切な場所も限られていたため、ゴール地点、ミックスゾーン、メディアゾーンを巡回しながら対応した。しかし、メディアゾーンへのアクセスが難しく、ふらついている選手への対応が遅れ、医務室に搬送された選手（すぐに回復）もいたため、今後の対策が必要と感じた。

マラソンや競歩（図 10）は競技場外のロードで行われ、選手村から約 1 時間離れており、早朝の出発となった。バス運転手の道順の把握が不十分で、会場までの道に迷ったり、到着場所が異なったり（入れない入り口から入ろうとして、その場で降ろされ

図 10：競歩会場

る）といった問題があり、スムーズな移動ができなかった。さらに、雷による競歩スタートの遅延もあり､選手たちは落ち着かない状況だったと思われる。幸い、レース中に大きなケガや熱中症は発生せず、無事に終了した（図 11）。

今回のサポートでは、試合直前に痛みが発生し、各種画像検査の結果、棄権を選択した選手や、以前の負傷箇所に痛みが再発し、サポートを受けながら競技に出場したものの納得のいくレースができなかった選手もおり、いくつかの課題が浮かび上がった（図 12）。

日本選手団以外のチームで Covid-19 感染が拡大しているとの情報があった。詳細は当初あまり公表されていなかったが、後にメダリストの中に感染者がいたと報道された。日本選手団には注意喚起を行い、各自が自己防衛に努めた結果、感染症が発生することはなく良かったと安堵していた。

【ドーピングコントロール】

本大会でもドーピング検査が実施された。競技会前検査の対象者はいなかったが、競技会中の検査として合計 9 名の選手が該当した。さらに 4 名はエリア記録申請のため、自主的に検査を受けた。陸上

図 11：競歩会場で WA ドクターと

図 12：ポリクリニック MRI 検査

競技場内のドーピングコントロールステーション（DCS）やロードレースの会場で検査が行われたが、設備は整っており、個室も十分に用意されていたため、選手へのストレスは比較的少なかったと思われる。また、1 名に対しては血液検査が実施された。日本から派遣されたドーピングコントロールオフィサー（DCO）もおり、日本語での対応が可能な場面もあったため、選手たちは安心して検査に臨めたと思われる。大会全体を通じて、治療使用特例（TUE）を申請している選手や、事前確認で問題となる薬やサプリメントを使用している選手はいなかった。

【最後に】

東京オリンピックに続き、パリオリンピックにもドクターとして帯同した。オリンピックは特有の雰囲気があり、選手たちも含めて緊張感を持って臨むこととなる。ケガや体調の変化､精神的な緊張など、メディカルスタッフとしてサポートすべき場面が多

く、日々試行錯誤しながら活動を続けた。オリンピックは選手にとって大きな目標の一つであり、多くの選手が万全な状態で臨めるよう、さらに効果的なサポート方法を検討していきたい。